



皮膚を売った男

2020年/チュニジア・フランス・ベルギー等映画

配給：クロックワークス/104分

2021（令和3）年11月18日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督・脚本：カウテール・ベン・ハニア

出演：ヤヤ・マヘイニ/ディア・リアン/ケーン・デ・ポーウ/モニカ・ベルッチ/ダリナ・アル・ジュンディ/クリスチャン・ヴァディム/ヴィム・デルボア

👁️👁️ みどころ

ユダヤ人を救った外交官・杉原千畝の“命のビザ”は有名だが、ヨーロッパ圏を自由に往来できる“シェンゲン査証（ビザ）”はどうやったら得られるの？近時、西洋諸国の移民・難民を巡る問題は厳しさを増しているが・・・。

高倉健の背中に見事な彫りものは『唐獅子牡丹』（66年）として一世を風靡したが、背中にビザの刺青を彫り、人間そのものをアート作品にしてしまえば・・・？

“ある先例”にヒントを得た本作の問題提起は強烈！“人間アート”になることのメリットとデメリットは？ゲーテの「ファウスト」は悪魔と契約を交わした挙句、最後には魂を奪われてしまったが、本作の主人公は如何に？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆近時、ヨーロッパでは、移民問題、難民問題が大きな政治的テーマになっている。「アメリカ・ファースト」を唱えたトランプ前大統領は、移民、難民に厳しい対応を示したが、西ドイツのメルケル（前）首相は最も温かくそれに対応した。ユダヤ人やポーランド人等、ナチスドイツから迫害を受けた人たちの難民問題については、『杉原千畝 スギハラチウネ』（15年）（『シネマ36』10頁）で描かれた、“命のビザ”を発給した外交官・杉原千畝の活躍が有名だが、国境を合法的に通過するには、どうしてもビザ（査証）が必要だ。

しかし、人間の背中にビザのタトゥーを施し、人間そのものをアート作品にしてしまえば、それをシェンゲン査証（ビザ）としてヨーロッパ圏を自由に往来できるのでは？

何度も観た予告編ではそんな問題提起が鋭く発信されていたから、本作は必見！

◆タトゥー（刺青）をテーマにした日本の小説や映画は多い。小説の代表は、谷崎潤一郎の「刺青」、映画の代表は、学生運動全盛期に一世を風靡した、高倉健主演の『唐獅子牡丹』（66年）だ。ヤクザ映画では主人公の背中彫りものが不可欠だが、後に登場した藤純子の背中彫りものの美しさは一級品だった。

それらに比べると、難民になってしまった本作の主人公サム（ヤヤ・マヘイニ）の背中に、有名な芸術家であるジェフリー（ケーン・デ・ボーウ）が施した“ビザのタトゥー”は美しくも何ともない。しかし、タトゥーが施された人間それ自体がアート作品だという面白さもあって、その“商品”が展示された展覧会は大人気だ。しかし、なぜ今サムはそんな立場になっているの？これはサムが望んだこと？それとも・・・？

◆サムが難民になったのは、2011年のシリアで、ラッカ出身のサムが家柄の違う恋人アビール（ディア・リアン）へプロポーズした言葉が、自由への革命を求めた国家反逆罪だとみなされたためだ。運よく逃亡できたサムは、何とかレバノンのベイルートへ亡命したが、その一年後、アビールは外交官のジアッド（サード・ロスタン）との結婚を強いられ、サムは難民としてみじめな生活を送っていた。

そんな中、ジェフリーが持ちかけたオファーが「難民であるサムに大金と自由を与える代わりに背中にタトゥーを施し、人間であるサム自身がアート作品になる」というもの。そんなことがホントに可能なの？秘書のソラヤ（モニカ・ベルッチ）を通じて重要な契約条項を確認したが、そこには、サムがビザによる自由と膨大な報酬を受領する代わりに、商品の展示に必ず出席する等、ジェフリーへの誠実な協力義務が明記されていた。サムはそれを十分納得したうえで、背中にビザのタトゥーを施すことを承諾したが、そんな契約は公序良俗に反するのでは？

◆背中に査証に見立てたタトゥーを施されアート作品となったサムは、ベルギーのブリュッセルにある展覧会場に入ったが、彼の頭の中はかつての恋人、アビールのことでいっぱい！豪華なホテルに滞在し、アート作品としての義務を果たしつつ、アビールとの“逢瀬”を楽しむ自由を得たことに大満足していた。しかし、それって本当に満足すべきことなの？

ある日、サムの下にやってきた人権団体「シリア難民を守る会」の男から、「芸術家による搾取から君を守るためにやって来た」と同情の言葉を並べられ、サム本人の協力を仰がれると・・・？さらに、どこかの記事を見た母親から、なぜ人間アートとして見せモノの対象になっているのかと説明を求められると・・・？更に、二人の再会を目撃したジアッドが、サムがアート作品になっていることを知らないアビールを展覧会場に連れ出し、サムの展示ぶりを見せつけると・・・？

◆本作の監督は、1977年にチュニジアで生まれた女性カウテール・ベン・ハニア。彼女は芸術家ヴィム・デルボアが2006年に発表した作品「T i m」に影響を受けて、自分自身のオリジナル脚本を書き上げたそうだ。

本作のパンフレットには次の4つのコラムがある。すなわち、

①滝本誠氏（映画評論家）の「スキンケア」

②落合正幸氏（映画監督）の「心地よい映像からにじみ出る強いテーマ」

③小崎哲哉氏（ジャーナリスト／アートプロデューサー）の「グロテスクなのはアート界だけではない」

④斎藤環氏（精神科医）の「皮膚と名前」

これらを読めば、人間の背中をアート作品とすることは是非、罪深さ（?）、非人間性（?）がよくわかるが、なぜサムはそのことに気づかなかったの？

◆自分の背中にタトゥーを施し、自身がアート作品になれば、シェンゲン査証を得てヨーロッパ圏内を自由に行き来できる。その上、多額の報酬まで手に入る。こんなおいしい話はない。サムはそう思ったし、現にそのメリットを享受したが、その反面、彼が失ったものは一体ナニ？ゲーテの『ファウスト』では、ファウストは悪魔と契約を交わした挙句、最後は魂を奪われてしまったが、本作のサムはジェフリーと契約を交わすことによって、ホントは何を獲得し、何を失ったの？そこでの印象的な言葉は、「恵まれた側の人間」（＝ジェフリー）と「呪われた側の人間」（＝サム）というものだが、そんな両者に“契約”という概念が成立するの？

本作中盤には、美術館の中でサムと口論になったジアドが1100万ユーロの価値のある美術品を壊してしまうというトラブルが発生し、その謝罪や賠償問題、展覧会の継続の可否、更には保険金支払いの可否等々の問題が噴出して来る。更に、アート作品たるサムの競売のシークエンスまで登場してくるが、こんな人身売買（?）は合法なの？弁護士の私ですら、根源的な法律問題はよくわからないから本作は面白い。しかして、なんと500万ユーロでのサムの落札が決まった直後、サムはイヤホンに爆弾のスイッチに見立て、会場を大混乱に陥れたが、その真意は？サムは気が狂ってしまったの？しかして、本作に訪れる結末は？

2021（令和3）年11月30日記